川上 高司 ブログ アーカイヴ

2013年

2月1日

7時間に及ぶ元同僚同士の激突。滅多にないほど荒れた公聴会

1 月 31 日、議会では軍事委員会による､国防長官に指名されたチャック・ヘーゲルの公聴会が開かれた。軍事委員会の委員長はジョン・マケインで、指名発表当時から敵意をむきだしにてヘーゲルの指名を批判してきた。他の委員会のメンバーも程度の差はあれヘーゲルをたたきつぶそうと手ぐすね引いてこの日を待っていた。

予想通り公聴会はヘーゲルと委員会が激しく激突して荒れた展開となりしかも 7 時間という長丁場になった。特にマケインの口調は攻撃的でヘーゲルの発言をしばしば遮り、やや感情的に「イエスかノーで答えなさい」と迫る場面が多かったようだ。それに対してヘーゲルは、発言を遮られても落ち着いて「イエスかノーで答えられるものではない。もっと複雑だ」と切り返していた。

他の委員の質問も攻撃的で、ヘーゲルの過去の政治的言動や投票結果を逐一上げて揚げ足を取るものもあれば､「イランがなぜ君の国防長官就任を期待しているのかね」とおよそ本人には返答できない質問も飛び交った。

マケインとヘーゲルは 2007 年にブッシュ政権のイラクへの増派をめぐって意見が分かれた。ヘーゲルはブッシュの増派に反対で「外交政策上最悪の失敗になりかねない」と批判した。これに対してマケインは増派には賛成していたので両者は真っ向から対立した。その後 2008 年の大統領選挙では大統領候補だった同じ共和党のマケインではなく、ヘーゲルはオバマを支持したためいっそう険悪な関係に陥ってしまったのだ。

今回の公聴会でその「外交政策上の失敗」発言にこだわったマケインはイラクへの増派を「正しいと思うか否か」と激しく迫ったのに対して、ヘーゲルは「そういう問題ではない。それは歴史が判断することです」とかわして切り抜けた。もっとも世界を相手にする国防長官ともなればこの程度の攻撃は返り討ちにするくらいタフでなくては務まらないだろう。

ケリーの公聴会は穏便に終わり、投票でも賛成９４、反対３という圧倒的多数で承認された。ヘーゲルへの投票は来週行われるが、この荒れた公聴会をヘーゲルがうまく防戦したと評価するか終始押され気味で弱気だったと評価されるか。投票が終わってみるまではわからない。そしてこの公聴会は CIA 長官に指名されたブレナンの公聴会も厳しいものになることを示唆している。議会はまさにオバマ政権に立ちはだかるグレート・ウォールである。

2月7日

頑固一徹の強面ブレナンはCIAを改革するか

チャック・ヘーゲルの公聴会の様子を見て覚悟を決めた人物がいるとしたら、それは 2 期目の CIA 長官に指名されたジョン・ブレナンである。オバマ大統領 1 期目には対テロ政策のアドバイザーを務め、無人爆撃機によるテロリストへのピンポイント攻撃を主導した人物とされ、ブッシュ時代の米軍によるイラク人への拷問疑惑で公聴会で厳しく追求されることが予想される。もともと強面だが、その険しい表情がますます険しくなるに違いない。

ブレナンはアイルランド系で厳格で敬虔なカトリック教徒である。幼少のころから厳格で､彼の弟はブレナンを「もう一人の父親」と評している。現在 57 歳でオバマ大統領とも年齢が近い。　ブレナンはインドネシアの大学やカイロのアメリカン大学でアラビア語を学び、CIA 入所後はサウジアラビアに駐在しイスラム社会への理解を深めた。2001 年からはテネット長官の補佐官に就任したがブッシュ大統領の進めたイラク戦争を批判したため政権から嫌われ、国家対テロ対策センターや新設された情報長官の副長官へと脇に追いやられた。ブレナンはイデオロギーに左右されず己の信念で行動する。そのため大統領に対する批判にも躊躇しない。

閑職に追いやられてそのまま引退するかと思われたが、2007 年にオバマの大統領選挙運動に参加し当選後は対テロ政策のアドバイザーとなり大統領の信頼を得ることとなった。ブレナンは無人爆撃の推進者と言われているが、彼自身は無人爆撃には個人的には反対している。倫理に反するからだというのがその理由である。とりわけ CIA が爆撃のような軍事行動をすることには猛烈に反対している。CIA は「情報収集活動に専念するべき」というのが彼の信念である。ブレナンは CIA 一筋の気骨者なのである。

CIA が無人爆撃によるテロリストの暗殺をいっそう推進するようになると軍と CIA との境界が曖昧になり始め、軍人のペトレイアスが CIA 長官に就任するとますますその曖昧さが加速されていきブレナンは懸念していた。軍事行動は曖昧でときとして超法規的で隠密（clandestine）となる。ブレナンにとって CIA の活動は明確で法律的で機密（covert）でなければならないのだ。

ブレナンは CIA 長官に就任したら、さっそく CIA を無人爆撃という任務の泥沼から救いあげるつもりでいる。CIA は本来の情報活動に戻るのだ。もしブレナンがこの信念を貫いたらオバマ政権の対テロ政策は大きく変わるか、ブレナンが去るかのどちらかだろう。大統領の意向に添わない可能性もあるが、ブレナンはオバマ大統領のお友達になるつもりはない。従うのは己の良心と信念のみ。迎合しないゆえに大統領の信頼は厚いのである。

2月8日

ブレナン公聴会－CIAを本来の姿に戻す

2 月 7 日には、ヘーゲルに続いて CIA 長官に指名されていたジョン・ブレナンの公聴会が開かれた。ブレナンの指名は議会から批判がでており、先週行われた国防長官の公聴会の様子からかなり厳しいものになると予測されていた。

公聴会は 3 時間に及んだが、そもそも公聴会が始まる前にアメリカの活動団体「コード・ピンク」が「CIA は殺害を止めよ」や、「無人爆撃機でこどもを殺すな」とい

ったメッセージをブレナンの後ろに掲げて叫び続け、スタートから荒れ模様だった。その後も何度も活動家たちは叫び公聴会を妨害したため、上院情報委員会の委員長は妨害のたびに議事を止めて活動家を排除しなくてはならなかった。先週の公聴会ではヘーゲルは正面から攻撃を受けていたが、ブレナンは背面から攻撃を受けて騒然とした 3 時間となったようだ。

国家機密に関するということからあまり突っ込んだ質問はなく、話題になっている拷問疑惑や無人爆撃などに質問が集中しブレナンは如才なく応答してやりとりそのものはそれほど荒れたものではなかった。残念なことにアフガニスタン情勢や撤退政策についての質問はなかった。

水攻めによる拷問に関してはブレナンは「拷問にあたる。やってはならないこと」と明言し、拷問を認めないという自身の信念を貫いていた。さらに、軍事行動と CIA 活動の境界があいまいになって CIA が特殊部隊化しているのではないかという核心に迫る質問に対しては、CIA は本来の情報収集活動を「COVERT」オペレーションによって強化する、活動についてはできる限り透明性を持たせたいと現状を改革する意欲を見せた。ブレナンにとって CIA の活動はどこまでも「COVERT」つまり法律に認められた「機密」でなくてはならないのだ。その言葉通り、CIA の本来の姿を取り戻すべく尽力してもらいたい。

2月16日

オバマ大統領の一般教書演説と閣僚人事

オバマ大統領は 2013 年の一般教書を発表したが、その内容はほとんどが内政に関わることだった。財政赤字の解消、医療制度や税制改革、教育やエネルギー、移民問題そしてアフガニスタンからの撤退､銃規制問題とアメリカが抱える問題を取り上げ、解決を訴えた。その中で、オバマ大統領は各家庭が強くなれば地域の共同体が力を持ちそれらが集約されて究極的にはアメリカという国家が強くなる、だから各家庭や個人の力を高めよう、それが世界に通用する国家の強靭な基盤となると述べていたのが印象に残る。

ピュー・リサーチ・センターの世論調査によれば、オバマ政権に国民が期待するのは内政問題だと答えた割合は８３％、外交に期待する割合はわずか６％だった。ブッシュ政権時代には内政に期待した国民はおおむね５０％台だったことに比べると国民の意識が内向きになっていることがはっきりと数値に表れている。

では内政では誰に期待するかというと、オバマ大統領の支持率が５９％と高めであるのに対して議会への支持率は２３％という低さである。これは共和党と民主党が議会でなにかにつけて対立していることにうんざりしている国民の気持ちが見て取れる。今後両党の対立は増えるであろうと考えている国民は６６％と、2009 年当時が３９％だったことに比べると悲観的である。それでも国民の５０％は妥協してうまくやってほしいと考えているのである。

だが、党の壁､グレートウォールはそう簡単には崩れないようである。国防長官に指名されたチャック・ヘーゲルの承認投票は共和党の議事妨害にあって 2 月末まで延期されてしまった。来週には NATO でアフガニスタンに関する会議があり、アメリカの新しい国防長官はおそらく出席できないという事態に陥っている。実は国民の６

５％はヘーゲルをよく知らないのであり、共和党が猛烈に反対しても民意を反映していないどころか、共和党は党益のためにヘーゲル承認を阻んでいるとしか国民の目には映らないのである。

そしてヘーゲルの承認難航をみて弱気になって指名辞退に傾いているのが NATO の米軍司令官に指名されているジョン・アレン将軍である。アレン将軍はアフガニスタン司令官の任務を終えて帰国したが、やはり過去のスキャンダル事件を気にして「猛烈なプレッシャーを感じている」とすでに撤退モードなのである。アレン将軍の力量こそがアフガニスタン撤退政策に不可欠であるのに、共和党はまるでアメリカの国益を内側から損ないかねない行動に走っている。

オバマ大統領が演説の冒頭付近で「国民のみなさんは党益の前に国益ありき、と考えている。妥協をすべきだと国民のみなさんは我々に期待している。団結してこそ前進できるのです」と党を超えた団結を切々と訴えていた。閣僚承認だけでなく財政問題や税制など共和党との協力は避けて通れない。どう協力をとりつけるか、国内政治に国民の期待が集中するだけに入念な議会対策が求められるだろう。

2月18日

テロが頻発するパキスタン－激化する宗派闘争

17 日、パキスタン南部の大都市クエッタの市場で自爆テロが発生し少なくとも 81 人が死亡するという惨事が発生した。現場となった市場はシーア派ハザレ人の居住地であり、多くのハザレ人が巻き込まれ日曜日の買い物に出かけていた女性やこどもも多く巻き込まれた。

ハザレ人はアフガニスタンの中部に住み、スンニ派民族に囲まれてひっそりと暮らしているシーア派である。パキスタンのバロシェスタン地域はシーア派が多くハザレ人も住み着いている。今回のテロはそのシーア派を明らかに狙ったテロで、スンニ派過激派組織がすでに犯行声明を出している。

1 か月ほどまえにもクエッタでは爆弾テロが起こっておりこのときもシーア派が集まる地域が狙われた。パキスタンではスンニ派によるシーア派への暴力行為がエスカレートしつつある。それに対して「ザルダリ政権はなにもしない」とシーア派からは不満の声があがっている。今回のテロが起こると遺族を含むシーア派の住民たちは 76 時間の座り込みを始めて政府への抗議行動を起こし、一刻も早く実行犯を逮捕するように要求している。

アルジャジーラによれば、ハザレ人を狙ったテロで犠牲になったのは昨年一年間で 400 人を超える最悪の数字を記録したという。だが今年にはいってすでに 200 人を超える犠牲者が出ており宗派闘争の激化は明らかである。テロのほとんどがこのバロシェスタン地方で起こっており、政府が有効な対策を早急に立てなければシーア派とスンニ派の闘争が壮絶なものになりかねない。イラクでかつて起こった熾烈な宗派闘争もまだ完全に収束したとはいいがたく、イラクでは同日シーア派を狙った爆弾テロがバグダッドのシーア派居住区域で発生し多くの死傷者が出ている。

シリアでもシーア派のアサド政権とスンニ派の反体制派の闘争は、一向に終わりが見えない厳しい状況にある。シリアからパキスタンまで宗派闘争が拡大・激化すればまさにその中心にあるアフガニスタンの情勢も不安定になっていく。まるでアメリ

カの撤退を見越して過激派の動きが始まっているかのようである。地域の安定をどうオバマ政権は確立するのか、厳しい撤退政策になりそうである。

2月23日

ケリー国務長官の初演説ー軍事力より外交優先

2 月 13 日、ケリー長官は就任以来初めて国務長官としての演説をバージニア大学で行った。バージニア大学は初代国務長官であったトマス・ジェファーソンが創設した由緒ある大学である。ジェファーソンは自らの墓碑銘に人生３つの功績を記したがそのうちのひとつが「バージニア大学の創設」だった。３つの中に第３代大統領就任ははいっていないので、彼にとって大統領職よりもバージニア大学のほうが重要だったのだろう。

初代国務長官の人生をかけた思いがつまった大学を最初の演説の場にあえて選んだ点にケリー長官の国務長官にかける強い信念を感じるが、アメリカではそれほど大きなニュースにはならなかった。むしろロシアのメディア「ボイス・オブ・ロシア」は大きくとりあげて解説をネット版に載せた。まるでケリー長官の一挙一動を見守りそこからアメリカの外交政策を読み取ろうとしているかのようであり、同時にそれはケリー長官への大きな期待、米露関係の改善への期待が溢れているようにも見える。

ケリー長官は「国務省には強力な援護者がいないので予算を獲得できない」と、国防総省は国防企業の猛烈なロビー活動で予算獲得に成功していることを皮肉り、もともと予算がないから予算削減もできないとジョークを飛ばした。そしてアメリカの外交政策を妨害しているのは実は議会だと共和党の頑なで非協力的な姿勢を批判した。

ボイス・オブ・ロシアによればケリー長官は「軍事力で問題を解決すれば結局高くつく、アメリカは外交力で解決していくべきでそのために予算を惜しんではならない」と述べたが、そこに読み取れるのはいわゆる「ソフト・パワー」による外交への転換だという。一期目からオバマ大統領は「ソフト・パワー」を謳っていたが、ロシアから見ればむしろアメリカの態度は強硬だったとロシア側はとらえており、「2 期目になって再選を考えなくてもよくなったからきっとオバマ大統領は自分の理想を追求する。ソフト・パワーを駆使する外交を展開するだろう」と希望が膨らんでいるのである。

ケリー長官は当初イスラエルを最初の訪問国としていたが取りやめてイギリス、ドイツ、イタリア、フランス、トルコ、エジプト、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、カタールを訪問することに変更した。明らかにシリアやアフガニスタンなどの中東問題に重点を置いた外遊であり、アメリカ二期目の外交政策がいかに中東問題を重視しているかが伺える。

残念なことにアレン将軍は NATO 司令官の指名を辞退して退役したため、オバマ大統領は急遽後任人事を決めなくてはならなくなった。ヘーゲル国防長官の承認も遅れている。アメリカ外交政策が内政に足を引っ張られれば、ケリー長官の言うように「議会がアメリカの信頼を貶めている」と再びアメリカの威信が失墜しかねない。そして議会のそんな惨状はジェファーソンをはじめとする建国の父たちが望んだものではないはずだ。